

外国人散在地域における 日本語教室の運営

うわじまにほんごの会代表 山下 文子

宇和島市の外国人

宇和島市は愛媛県の南部に位置し、みかん栽培や養殖漁業など、第一次産業がさかんな地域です。人口はおよそ8万人で、そのうち、外国人住民は0.4%のおよそ330人。中国、フィリピン、韓国、ベトナムなどのアジア圏の外国人が9割以上を占めます。アジア圏の外国人は、日本人の配偶者であったり、技能実習生であったり、留学生であったりとその背景はさまざまです。ほかにも、JETプログラムで外国語指導助手として在住している外国人もいます。

そんななかで、日本人の配偶者として在住している外国人の多くが、長年住んでいるにもかかわらず、日常生活のなかで孤独を抱えていました。その理由は、日本語に自信がないために日本人とコミュニケーションがとれず、家に閉じこもりがちになってしまっていることや、ほかの外国人がどこに住んで何をしているのか、情報を得る手だてがなく、知り合うことができないためでした。

外国語指導助手らは、市や県の教育委員会やJETプログラムのサポートによってお互い情報を共有したり、一緒に余暇を過ごしたりしているようですが、日本人配偶者のアジア圏の外国人には、公的機関などがサポートするようなネットワークがありません。そのため、情報やサポート機関の不足から生まれる、家庭のなかだけの日常に、孤独を感じていたのではないかと思います。

(公財)愛媛県国際交流協会からの委託事業として2009年から日本語教室をはじめたのは、一刻

も早くその孤独感を解消するための窓口になれば、という思いがきっかけでした。そして2012年には、日本語教師やそれをサポートするボランティアアシスタント9人で、日本語教育を通した外国人支援を行う団体として「うわじまにほんごの会」を立ち上げました。

宇和島市の日本語教室

日本語教室の開講にあたっては、(公財)愛媛県国際交流協会や地元自治体である宇和島市にも広報や会場の確保などで協力していただきました。中国、フィリピン、ベトナム、インドネシア、アメリカ、イギリス、ニュージーランドなどいろいろな国籍の外国人が集まり、1クラス3人~10人程度の教室となりました。開講日が日曜日の午後だったこともあって、出席人数は日によって1人だったり、10人を超えたりしましたが、日本語教師も外国人も1週間に1回の教室を楽しんで過ごせるようにしたいと思いました。

教材は、日本語の語彙と文法を主に学習する既存の教材を使いましたが、受講者が日常生活を送るうえでの手助けになるよう、スーパーなどでの買い物の方法や、「方言」なども取り入れました。その結果、毎回授業のなかで話が盛り上がり、教室のタスクを完遂できない回も何度もありました。でもそれは、うれしい結果でした。

また、宇和島市内にこれだけ多国籍な外国人がいたことに、外国人自身が驚いていました。互いに出会わないまま、つながるきっかけがないまま

過ごしていた小さな宇和島のまちに、外国人がこれだけ住んでいたことを知るやいなや、連絡先を交換したり、互いの身の上を語り合ったりしました。

教室では、お互いの意見を遠慮なく話したり、冗談を言って笑顔を見せたりと、おしゃべりが弾むのは必然でした。これまで日本語を話すのが不安だったという外国人も、日常の孤独感を思わせるような雰囲気は一切ありませんでした。

日本語のスキルアップのための日本語教室というだけでなく、外国人が集うおしゃべりの場になったことで、ほかの大都市のような日本語教室とはまた違った小さなコミュニティーづくりができたのではないかと思います。SNSでもあつという間につながり、今では知り合った外国人同士がそれぞれの友人を巻き込んでいき、コミュニティーは確実に大きくなっています。



宇和島市で開催されている日本語教室の様子

多文化共生の実現

日本語教室は、日本人にとっても多文化の交わる時間としていろいろな気づきがあったと思います。これまで全く外国人と関わる機会のなかった日本人も、日本語教師をサポートするボランティアアシスタントとして参加してくれました。アシスタントの方たちは、宇和島市にこれだけ外国人がいること、外国人が普段の生活でいろいろと日本語で苦労していることなど、知るよしもなかったと言います。

それを知ったアシスタントの方たちは、日本語に自信がないことでひきこもっていた外国人にな

んとか外に出てきてほしいと、教室では積極的に声をかけ、いつも温かくお茶やお菓子をふるまってくれました。細かく日本語を指導するというよりは、簡単な日本語でやりとりする大切な時間を作ってくれました。

その雰囲気作りは、言語を超えたぬくもりを感じましたし、より気軽に教室へ足を運ぶきっかけにもなったと思います。日本人がもつおもてなし精神が功を奏したと思います。外国人同士のおしゃべりもさることながら、くだけた雰囲気日本人と話せるいい機会になり、多少自信のなかった日本語でもコミュニケーションのツールとしてうまく活用していました。

多文化共生というのは、思いやりの一言に尽きるのではないかと思います。知らないまま、分からないままでは、孤立するばかりです。日本人同士でも違った個性があるように、生まれ育った環境がさらに違う外国人には、外へ出るはじめの一歩になるようなきっかけが必要です。一度不安ながらも外へ出て、知り合って、そこから生まれる絆のもとに、真の多文化共生が実現するのではないのでしょうか。

今後の宇和島市における日本語教室は、日本語“プラスアルファ”教室を目指しています。これまで、外国人が外に出るきっかけだった日本語教室から、外国人が自分の国の文化などを外に発信していけるような、地域との関わりがもてるような日本語教室になるよう、より多くの市民に知ってもらえるコミュニティーにしていきたいと思っています。



お互いの国の料理を教えあう料理教室も開催